## 黙想:受難の水曜日

黙想のテーマ:「ユダもイエスによって選ばれた使徒だった」「神の憐れみは私たちの弱さよりも大きい」「希望が私たちを神へと導く」

ユダもイエスによって選ばれた使徒 だった

神の憐れみは私たちの弱さよりも大きい

希望が私たちを神へと導く

「十二人の一人で、イスカリオテの ユダという者が、祭司長たちのとこ ろへ行き、『あの男をあなたたちに 引き渡せば、幾らくれますか』と 言った。そこで、彼らは銀貨三十枚 を支払うことにした。そのときか ら、ユダはイエスを引き渡そうと、 良い機会をねらっていた」(マタイ 26・14-16)。教会は、伝統的に聖週 間の水曜日にユダの裏切りを思い起 こします。イエスを裏切る準備をし ているこの使徒にとって、今やかつ てメシアと信じた方との最初の出会 いの記憶は遠いものとなってしまい ました。イスカリオテのユダもま た、キリストご自身によって使徒に 選ばれた一人でした。イエスの傍ら で、他の弟子たちと同じように幸せ になり、やがて教会の柱となる道も あったはずです。しかし、彼はすべ てを与えてくださった方を、奴隷の 値段で売る道を選びました。聖書は 霊感に従ってこの事実を語ります。

悲劇的な結末は最後の晩餐で起こり ました。イエスは迫り来る受難の苦 悩と、愛する人々から見捨てられる という悲しみに胸を痛めておられま した。彼らが夕食の席に着いたと き、イエスは言われました。「はっ きり言っておくが、あなたがたのう ちの一人がわたしを裏切ろうとして いる」(マタイ26・21)。他の十一人の 使徒たちは、自らの弱さを痛感しつ つも、キリストの言葉を深く信頼し ていたので、驚いて叫びました。弟 子たちは非常に心を痛めて、 | 主 よ、まさかわたしのことでしょう か」と、代わる代わる言い始めまし た。イエスはお答えになりました。 「『わたしと一緒に手で鉢に食べ物 を浸した者が、わたしを裏切る。人 の子は、聖書に書いてあるとおりに 去って行く。だが、人の子を裏切る その者は不幸だ。生まれなかった方 が、その者のためによかった』。イ エスを裏切ろうとしていたユダが口 をはさんで、『先生、まさかわたし

のことでは』と言うと、イエスは言われた。『それはあなたの言ったことだ』」(マタイ26・22-25)。

その後、ユダがイエスの目を見つめ たかどうか、分かりません。もし見 つめていたなら、イエスの目の中に は憎しみや怒りは何ひとつ見いだせ なかったでしょう。キリストはユダ を使徒として招き、ともに歩むよう 呼びかけたときと同じ熱意をもっ て、なおも友としてユダを見ておら れたのです。「裏切りと放棄を味わ うまでにわたしたちに仕えられた神 の御前で、わたしたちに何ができる でしょうか。わたしたちが創造され たそのわけを裏切らず、本当に大切 なことを手放さないことです。わた したちは、神を愛し、隣人を愛する ためにこの世にいます。他は過ぎ去 り、これだけが残ります I m。

ユダの裏切りは、一瞬の愚かさでは なく、小さな不誠実の積み重ねの結 果でした。ヨハネによる福音書に は、重要な出来事が記されていま す。それは過越祭の数日前、ベタニ アのマリアが高価な香油でイエスに 油を注いだことについて、無駄遣い だと批判する場面です。ユダは一 見、利他的な理由を掲げて彼女を非 難しました。しかし、「彼がこう 言ったのは、貧しい人々のことを心 にかけていたからではない。彼は盗 人であって、金入れを預かっていな がら、その中身をごまかしていたか らである」(ヨハネ12・6)。

しかし、一人ひとりに絶えず呼びかけ私たちの帰りを待っておられる神にとって、その過ちも、いかなる人間の弱さも、神の愛を打ち負かす力はありません。聖ホセマリアは、限りない憐れみに満ちた神の中に、私たちを護る真の鎧を見いだしました。「私たちは皆、欠点を持ってい

ます。しかし、それらの欠点によって神の呼びかけに背を向けるのではなく、むしろその呼びかけに身を委ね、神の優しさに包まれるべきなのです。かつての戦士たちが鎧を身にまとったように、私たちもこの神の善で身を包むのです」[2]。

聖アウグスチヌスは、私たち自身の 弱さに立ち向かう最善の方法とし て、神の前で謙虚に願い求めること を勧めています。特にイスカリオテ のユダに言及して、次のように述べ ています。「彼が主を裏切り、それ を後悔した後、もしキリストの名に おいて祈ったなら、彼は赦しを求め たでしょう。もし赦しを求めたな ら、彼は希望を持ったでしょう。も し希望を持ったなら、彼は憐れみに 希望を置いたでしょう | 図。 そし て、聖書に記してあるような(マタ イ27・5) 結果にはならなかったで しょう。主は、ユダが滅びることを 望んではおられませんでした。それ は、誰一人として滅びることを望んでおられないからです。イさされないからです。で友は、これない方になるとしてが描られるとしてを受いたようとは、ことが立ちを思いたの弟子であるという。というないないと願っておいるは、彼をもかしたいとでしょう。

また、ペトロもあの裏切りの夜に主を三度否みました。教会の礎となるはずの彼は、自らの罪を深く悔いユダの涙を流しました。一方で、自らしましたがありませんではいる謙虚さがありませんではいる。そ望を捨てずいは、希望を失っていましたが、発望を失ってしまったのです。

この福音書の一節について、聖ホセマリアは次のように述べています。

「希望の徳がどれほど偉大なもので あるか、考えてみてください。ユダ はキリストの聖性を認め、自らの犯 した罪を悔いました。裏切りの代価 として受け取った銀貨を、報酬とし て渡した者たちの前に投げ捨てたほ どです。しかし、彼には、神のもと に戻るために必要な徳、希望が欠け ていました。もし希望を持っていた なら、彼はなお偉大な使徒であった かもしれません。いずれにせよ、最 後の瞬間に彼の心の中で何が起こっ たのか、そして神の恵みに応えたの かどうか、私たちには分かりませ ん。ただ神のみが、最後の瞬間に彼 の心の中で起こったことを知ってお られます。たとえあなたが最も愚か なことをしたとしても、決して希望 を失わず、絶望しないでください。 すべきことはただ一つ、自分の過ち を認め、導かれるままに身を委ねる

ことです。そうすれば、すべてが正 されるでしょう | 141。

これは、今日の福音から学ぶことが できる教えです。どれほど大きな過 ちを犯したとしても、神の憐れみは それをはるかに上回ります。主のも とに立ち返り、恵みに心を開けば、 キリストが私たちの傷を癒やしてく ださるように、すべては癒やされる のです。「恐れや恥は率直であるこ とを妨げ、私たちの歩みを続けるう えで最大の敵となります。私たちは 土の器にすぎません。しかし、もし 率直に心を開けば、その土の器は青 銅のような強さを得るのです | ほる これは、教会の礎である聖ペトロ が、その謙虚さによって手にした強 さです。そして、この強さを、イエ スの母であり、私たちの母である聖 母マリアを通して、主イエスに願い 求めます。

- [1] フランシスコ、説教、2020年4月5日。
- [2] 聖ホセマリア、手紙2、47番。
- [3] 聖アウグスチヌス、詩編108注 釈、9番。
- [4] 聖ホセマリア、説教メモ、1968 年12月8日。
- [5] 聖ホセマリア、手紙2、41番。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/meditation/mokusou-jyunan-suiyou/ (2025/12/11)